

校長室便り

(文責)

ドーハ
日本人学校校長
酢谷昌義

今朝の「朝読書」の様子

「あいさつ」と「本の紹介」

中間休みに「全校集会」を行いました。今日はあいさつについての話と、先日いただいた本の紹介をしました。

まず「あいさつ」です。児童生徒数が増えたので、全体であいさつをするときは何となく大きな声でできているように思えます。しかし、集団の中に一人一人が埋もれてしまっているように感じます。32名全員がしっかりと声を出してなくても、数の力で元気良く聞こえているかなという感じですか。「自分一人くらい大きな声であいさつしなくても…」とと思っている子どもはいなくても、「自分はしっかり大きな声であいさつしよう！」と積極的な子どもも少なくなっているような気がします。

あいさつは基本的な生活習慣の中で、人間関係を良好に保つためにも最も大切なものだと思います。一人一人が気持ちの良いあいさつができるように、継続して働きかけていきたいと思っています。



全校集会での「委員会発表」

次に「ハッピーのおくりもの」という、先日いただいた本を紹介しました。とても良いお話なので、ぜひたくさんの人に読んでみてほしいことと、進んで本が読める人でないと、自分から学ぼうとする人にはなれないということをお話しました。読書の力は、新しい学力を獲得する大前提となるものです。いろいろな機会を通して本を読むことを働きかけていますが、本の楽しさを伝えられるようにさらに工夫していきたいと思っています。

少し話は変わりますが、人は一生の内に、いったい何冊の本を読むことができるのでしょうか。本の冊数そのものはたくさん読めるかもしれませんが、「心に残る本は200冊ほどしか読めない」



いただいた本の紹介をしました

という話を聞いたことがあります。この話は小学生の頃に聞いたことですが、「たった200冊しか読めないのか」と思ったことを、今でも鮮明に覚えています。確かに今、心に残っている本がどれだけあるかと聞かれても、とても200冊もあげることはできません。私自身ももっともって本を読まなければならないと思っています。

1か月間全く本を読まなかった人の割合が52%だと、今日のインターネットの記事にありました。読まない人の多くが「時間がない・読みたい本がない」と解答しています。しかし「本に向かわないことには何も変わらない」と私はいつも思っています。

南西アジア・中東・アフリカ地区校長会

26日から3日間、標記の校長研究協議会がトルコで行われます。その会に出席するために、明日から今週末まで学校を留守にいたします。参観授業・全体会等が計画されている中、大変ご迷惑をおかけしますがよろしく願いいたします。

研究協議会の内容や皆様の参考になる情報等につきましては、来週の校長室便りを通じてお知らせいたします。

校長室便り

(文責)

ドーハ
日本人学校校長
酢谷昌義

イスタンブール日本人学校の掲示物

「校長研究協議会」から

10月26日から29日までの3日間「南西アジア・中東・アフリカ地区校長研究協議会」が、トルコのイスタンブールで行われました。この地区の日本人学校17校と、準全日制補習授業校1校から18名の校長が集まりました。指導者として外務省・文部科学省・海外子女教育振興財団から5名の担当者がお見えでした。

まず最初に時間をかけて説明されたのは、来年度小学校から始まる「新学習指導要領」についてでした。学習指導要領は、ほぼ10年ごとに改訂されてきていますが、これはその時代の教育をめぐる状況を踏まえているということがポイントとなっています。何よりも大きいのは、これまで1度も行われたことがなかった「教育基本法」が改正され、その改正教育基本法のもとで今回の改訂が行われているという点です。

視学官が力説されたのは「今、義務教育を受けている

子ども達が、20年～30年後の社会で中心的な役割を果たしていくために何が必要なのか」ということでした。今から20年後の2030年には人口は1割減、15歳以上の労働人口は現在の6700万人から1100万人の減となるそうです。少子高齢化がますます進んだ日本で、その中核となるのが今の子ども達なのです。

視学官のお話の中で、私は「自立」という言葉がキーワードだと感じました。改正教育基本法において義務教育がクローズアップされ、それが終わったときにはやはり「社会的自立」と「職業的自立」ができるだけの力をつけておかねばならないということです。そのために、学習指導要領が改訂されているのです。

新しい学習指導要領は、子ども達の現状をふまえ「生きる力」をはぐくむという理念のもと、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成が重視されています。また、言語や理数の力をはぐくむための教育内容の充実が図られ、授業時数も増加されています。

これからの教育は「ゆとり」でも「つめこみ」でもありません。次代を担う子ども達が、これからの社会において必要

となる「生きる力」を身につけてほしい。そのような思いで新しい学習指導要領は定められています。また「生きる力」をはぐくむためには、学校だけではなく保護者の皆様や地域の方々の協力がますます必要になると考えます。

その「生きる力」について、次号でもう少し詳しく取り上げてみたいと思います。

「スクールバスのロゴ」 貼り付け完了

昨日、2台のスクールバスにドーハ日本人学校と「英語とアラビアのロゴ」が貼り付けられ、これで本当にスクールバスらしくなりました。

納車からロゴの貼り付けまで、夏休みの間からずっとお世話いただいた中山様、本当にありがとうございました。



会場に掲げられた両国の国旗

校長室便り

(文責)

ドーハ
日本人学校校長
酢谷昌義

イスタンブル日本人学校全景

「生きる力」を考える

国が示している「生きる力」とは、変化の激しいこれからの社会を生きるために必要な「確かな学力」「豊かな人間性」「健康・体力」の知・徳・体のバランスのとれた力のことです。

それぞれをもう少し詳しく見ていくと

知：基礎的な知識・技能を習得し、それらを活用して、自ら考え、判断し、表現することにより、さまざまな問題に積極的に対応し、解決する力

徳：自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性

体：たくましく生きるための健康や体力ということになります。

このような力がなぜ必要なのかというと、これからの社会は知識が社会・経済の発展の源泉となる「知識基盤社会」になると考えられているからです。競争と技術革新が絶え間なく起こる「知識基盤社会」では、幅広い知識と柔軟な思

考力に基づく新しい知や価値を創造する能力が求められるようになります。

また知識そのものや人材をめぐる国際競争が加速するとともに、異なる文化との共存や国際協力の必要性が増大していきます。

そのため、これからの社会を生きる子ども達は、自ら課題を発見し解決する力、コミュニケーション能力、物事を多様な観点から考察する力、さまざまな情報を取捨選択できる力などが求められると考えられます。

このような社会の構造的な変化の中、次代を担う子ども達の「生きる力」をはぐくむことは、より一層重要となっています。

私は、この「生きる力」を次のように考えています。

『どのような環境・条件の下にあっても、生涯にわたって自分自身を高めていこうとする気力・体力』

変化の激しい時代だからこそ、少々のことにはへこたれ

ないたくましい精神力と、それを支える健康な身体が必要だと思います。私が願うのは、そうしたたくましい子どもの育成です。

ドーハ日本人学校では昨年の開校以来、小規模・少人数学校の特徴を生かし、いろいろな機会を通して自信を身につけさせ、学習・生活の両面で自分から前向きに取り組んでいけるような子どもにしたいと考えてきました。そういう積み重ねが、きっと「生きる力」を育てることにつながると信じています。

編入生の紹介

今日から新しい友達が増えました。

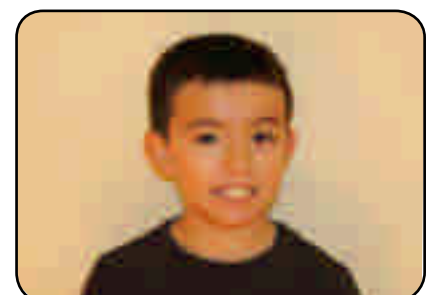
○小学部3年生

「○○○○○」君

神戸の小学校からの編入です。

3年生は一司君が抜けて寂しい思いをしていたので、また賑やかになるのではないかと期待しています。

早くみんなと仲良くなって、いろいろなことに精一杯取り組んでほしいと思います。



来賓：林総領事のあいさつ



会場近くのイスティクテール通り

校長室便り

(文責)

ドーハ
日本人学校
校長
酢谷昌義



小学部「算数」の授業風景

日本人学校は、国内の子ども達と同様の教育を受けさせることを目的とし、そのための教育課程を組むことで認可されている学校です。そこで最も重要なのは、日本語をしっかりと身につけさせるということです。それは国語の時間の指導に限られたことではなく、すべての教科において意識的な指導が必要になります。

単なる言葉の理解に終わらず、その意味や文化的背景までを意識して指導にあたることが、私達派遣教員には望まれていると改めて感じました。



中学部「英語」の授業風景

重要な「思考言語」の獲得

今回の校長会の研修を通して、これだけは伝えなければと感じていたのが「思考言語」の獲得という問題についてです。これは、文部科学省の田中視学官からの指導・助言の中で話された内容です。田中視学官は、以前国語科の教科調査官をしておられ、国語科の指導について最も理解の深い方です。

日本人学校における英語学習の在り方等について協議をしていた中で、視学官から「10歳までに母語の基礎を！」ということをお話されました。



小学部「国語」の授業風景

日本人学校で学ぶということは、まずは国語力をつけるということが大切なことであり、思考言語を獲得するための基礎作りをしっかりとしなければならぬと言われました。

言葉の「臨界期（それを身につけるために最も適した時期）」が10歳までであるということと合わせ、小学校の4年生くらいまでは日本語の習得、そのための基礎作りが大変重要であるということでした。

言葉の基礎がしっかりと身につくと、無意識に物事を言葉で考えられるようになり、抽象的な思考を自由に操作できるようになるのです。そこまで高めて初めて、思考言語を獲得したことになるのだと思います。このことは、私も自分自身の経験から非常に大切な点だと理解しています。

十一月の詩
○小学部低学年

「日本語のおけいこ」

谷川俊太郎

アイウエオ カキクケコ
だれかが どこかでならってる
サシスセソ タチツテト
だれかが どこかでなしててる
ナニヌネノ ハヒフヘホ
だれかが どこかでわすれてる
マミムメモ ヤイユエヨ
だれかが どこかでうたってる
ラリルレロ ワイウエヲ
だれかが どこかで
どこかで だれかが どなってる
いろはにほへと ちりぬるを
わかよたれそ つねならむ
ういのおくやま けふこえて
あさきゆめみし えひもせずん
アカサタナ ハマヤラワ
だれかが どこかでわらってる
イキシチニ ヒミイリイ
だれかが どこかでないてる
ウクスツヌ フムユルウ
だれかが どこかでおこってる
エケセテネ ヘメエレエ
だれかが どこかでねむってる
オコソトノ ホモヨロヲ
だれかが どこかで
どこかで だれかが あきれてる

校長室便り

(文責)

ドーハ
日本人学校
校長
酢谷昌義



高学年中学部：よさこいソーラン

学校などまずありません。与えられた環境・条件の中で、どうすれば教育効果を上げることができるのかという創意工夫をすることが、指導する側が最も考えなければならないことだと改めて思いました。

イスタンブール日本人学校

今回の校長会の幹事校はイスタンブール日本人学校でした。(校名はイスタンブールではないそうです)学校訪問をした際、子ども達が歓迎のパフォーマンスを披露してくれました。低学年が「ハンドベルの演奏と合唱」中学年が「和太鼓の演奏」高学年・中学部が「よさこいソーラン」で、どれも素晴らしい発表でした。しかしドーハ日本人学校の子供達の方が、元気の良い発表ができていたと思いました。イスタンブール日本人学校の規模は、ちょうどドーハの2倍(児童生徒数64名)です。

小学部1年生から中学部3年生まですべて単式クラス。派遣教員数は11名で恵まれていると感じました。しかし校舎は民家を使用していて、各教室や図書室が狭い上に校舎内に運動ができるようなスペースは全くなく、校庭もわずかな広さでした。特に低学年用図書室は、屋根裏部屋を利用しているので、とても狭く暗く蔵書も限られていました。運動スペースや図書室など、ドーハの方がずいぶん恵まれている点もありました。すべての条件が整っている

モハメッド先生

ハザール先生がお休みの間、アラビア語を指導していただくことになりました。日本語の勉強もしておられます。正式にはハッジホリデー後からですが、今週・来週と引き継ぎ等のためにも何度か来ていただきます。予定は最短1月末までですが、よろしく願いいたします。



低学年：ハンドベル演奏と合唱



中学年：和太鼓演奏

十一月の詩

○小学部中学年

「夕日が背中を押してくる」

阪田寛夫

夕日が背中を 押してくる
 まつかな腕(うで)で 押してくる
 歩くぼくらの うしろから
 でっかい声で よびかける
 さよなら さよなら
 さよなら きみたち
 晩ごはんが 待ってるぞ
 あしたの朝 ねすごすな
 夕日が背中を 押してくる
 そんなに押すな あわてるな
 くるりふりむき 太陽に
 ぼくも負けず なるんだ
 さよなら さよなら
 さよなら 太陽
 晩ごはんが 待ってるぞ
 あしたの朝 ねすごすな
 夕日が背中を 押してくる
 でっかい腕で 押してくる
 握手(あくしゅ)しようか わかれ道
 ぼくらはうたう 太陽と
 さよなら さよなら
 さよなら きょうの日
 すてきな いい日だね
 あしたの朝 またあおう
 さよなら きょうの日
 さようなら